Takashima Toujyu Kai 会報

高島藤樹会

No. 33
2023.9.15

（題字は、竹脇曇卿先生によるものです）

発　行
NPO法人　高島藤樹会
〒520-1224
滋賀県高島市安曇川町上小川225-1
藤樹書院・良知館内
電話・FAX　0740（32）4156
http://takashima-tojukai.com/

近江聖人中江藤樹先生に出会って

監事　西澤幸夫

藤樹会に入会させていただいたのは二〇一六年だったと思います。当時は滋賀県レイカディア大学（滋賀県のシニア大学）を卒業した時でした。レイカディア大学においてグループで文集を作るとき「琵琶湖の宝を世界に発信」と銘打って「中江藤樹先生」と「大石義民」について取組みました。中江藤樹先生について調べているとき、なぜ**近江聖人**と呼ばれるのかを疑問に思いましたが、調べても解らずそのままになっていました。

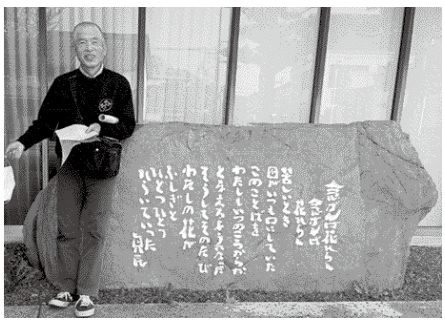
藤樹人間学塾でお世話になり八年が経ちます。藤樹先生の本を勉強していると、その時は読むことも難しく、ましてや内容を理解できませんが、なんとなくぼんやりと覚えていることがあり、別の場所でふとした時にその言葉や事象に出会うことがあります。すると途端にその言葉が気になり、本のどこに書いてあったかを探し、ネットで検索します。そうすることでおぼろげに意味がわかり、更に当時の武士や庶民の生き方など時代背景がみえてきます。塾長が「その時は理解できなくても続けていると、じんわりしみ入ってきます」と云われていますが、まさにその事だと思います。

令和五年の常省祭に参加した時に頂いたプリントに「**自反慎独**」という言葉がありました。以前習った藤樹先生の本にも書いてあったことを思い出しました。良知館に「**自反慎独**」が掲げられてあります（写真）。藤樹先生は日々反省し一人の時は特に慎んだ行動や心構えが重要と教えられていると思います。もっと深い解釈はあると思いますが、私にとってはあり余る教えであり、これからの高齢期を生きる指針にしたいと思っています。

私は消費生活アドバイザーとして消費生活について啓発活動をしています。その中の一つがエシカル消費の推進です。「エシカル」とは「倫理的・道徳的」の意味で、エシカル消費とは「人や社会、地域、環境等に配慮した消費行動」のことです。藤樹先生は消費のことだけでなく生活全体において慎独することを薦められています。エシカル消費はモノに対する消費の考え方を示していますが、藤樹先生はモノからコトに至るまで日常生活全般の行動を説かれました。すなわち**エシカル生活**を推進されていたんだと思います。今、ＳＤＧｓは世界のトレンドです。ＳＤＧｓの推進に**エシカル生活**は重要な事だと思います。藤樹先生が江戸時代初期にＳＤＧｓの行動規範を説かれていることは驚きです。地球のすべての人が特に先進国の人々が**エシカル生活**を実践すればＳＤＧｓの目標「誰も取り残さない持続可能な社会」に近づけると思います。

八月の藤樹人間学塾において内村鑑三氏の「代表的日本人」が話題になりました。その中に**近江聖人**として中江藤樹先生が紹介されています。その説く所は、身分の上下を越えた平等思想に特徴があり、武士だけでなく、農民、商人、職人にまで広く浸透し、江戸中期頃から自然発生的に「近江聖人」と称えられたとのことです。藤樹先生を仰ぐ人それぞれが「**近江聖人の教え**」を日々の生活に活かす事が重要」と思う今日この頃です。更に、藤樹会に入会したおかげで充実した高齢期を送ることが出来ていることに感謝しています。

（二〇二三年八月）



「念ずれば花開く」
大洲藤樹会交流会旅行で立ち寄った
坂村真民記念館
2022年11月

コラム：吉田公平先生（東洋大学名誉教授）

西晋一郎と中江藤樹

西晋一郎（一八七三・明治六年―一九四二・昭和一八年）は、哲学者として、生前は西田幾多郎と並び称された巨人であった。その有様は、門人知友が、西晋一郎の人と学問を語った『清風録』『續清風録』を見れば一目瞭然である。しかし、西田幾多郎の哲学と人となりについては、その著書は『西田幾多郎全集』として刊行を重ね、その哲学についても評伝についても、夥しい数が刊行されているのに対して、西晋一郎については、その著作が全集として刊行されることは、全く無かった。評伝・哲学について略述した縄田二郎先生の『西晋一郎先生の生涯と哲学』（理想社。昭和二八年）が唯一であった。縄田二郎先生は西晋一郎の晩年の弟子である。小生が広島大学に赴任したおり、広島大学の気風に少しく狎れた頃に、先生のお宅に伺った。近くなのでいつでもお会いできると暢気に構えていた。小生は先生にお会いすることはできなかった。ご遺族の皆さんにお会いして、西晋一郎先生に関心があることを告げると、縄田先生は、旧著を改訂増補した原稿を書き上げておられるとのこと。小生はその原稿のままにしておくのは勿体ない旨を述べて、小生が活字に起こして出版することを許して頂いた。それが、『西晋一郎の生涯と思想』（五曜書房。二〇〇三年）である。小生が「序にかえて」を執筆した所以である。活字起こしをしながら多くのことを学ぶことができた。

西晋一郎の哲学に関する研究は隈元忠敬著『西晋一郎の哲学』（平成七年。渓水社）が唯一か。最近、山内廣隆著『昭和天皇をポツダム宣言受諾に導いた哲学者西晋一郎、昭和一八年の御進講とその周辺』（ナカニシヤ出版。二〇一七年）、衛藤吉則著『西晋一郎の思想―広島から「平和・和解」を問う』（広島大学出版会。二〇一八年）がある。

西晋一郎は哲学者として研究されるよりは、西晋一郎の箴言（しんげん）・処世訓が熱心に読まれている。森信三、木南卓一、松下幸之助、稲盛和夫が心酔者によって熱心に読まれるのと同案である。

西晋一郎の業績は三部門に分かれる。第一は西欧哲学。第二は国学・国体論。第三は中江藤樹である。西欧哲学に関する西晋一郎の理解と評価については小生は門外漢なので講評する資格が無い。第二の国学・国体論については、資料整理が未完なので今は発言を控えたい。第三の中江藤樹については、小生は中国の王陽明・陽明学を学んできたので、その視点から、少しく考えるところを述べることにしたい。

とはいうものの、西晋一郎の本領は實は第二の国学・国体論にあった。国学・国体論が国策として最も喧しく論じられたのは昭和前半期であった。文部省数学局が『国体の本義』『臣民の道』を編纂し、その趣旨に沿う出版物を洪水の如く出版して、怒濤の如く宣伝した。この風潮のなかで、西晋一郎が力説した国体論・国学はこの流れを先取りしたものとして時運の寵児（ちょうじ）であった。この論理の中で、中江藤樹はことのほか高く評価された。『大日本帝国憲法』では天皇一人のみが主権を持ち、国民は臣下であった。西晋一郎は臣民の道徳倫理を忠孝の二字に凝縮する。君（天皇）に忠に、親に孝にと。そして忠は孝を基盤にすると。道徳倫理は孝に立脚することになる。それ故に西晋一郎は日本の学者の中では中江藤樹を最も高く評価したのである。

ひじりの声　上田　藤市郎

国際連合憲章は、国際の平和と安全の維持を目的として一九四五年六月に調印された。にもかかわらず、その加盟国であるロシアとウクライナの戦争は、国連憲章の精神を無視して続けられている。

国家の主導者によってひとたび戦争が始まると、これに抗って一部の国民が、反戦、非戦の行動を起こしたとしても容易に阻止できるものではない。

戦争遂行の世論は、国民の潜在意識に働きかける広告、テレビ、映画、ラジオなどに人が知覚できないような刺激で繰り返しメッセージを出し、好戦的に洗脳する。北朝鮮、中国、ロシア、台湾有事に備えて軍備の増強、軍事費の増額が話題にされ、戦争の不可避性をやむをえないことと訴えてくる。

自分の国を守るのは当然で、攻撃されないように軍備が必要で、攻撃される前に反撃する。そのためには相手の戦力以上の戦力を維持する。このように軍備が拡張される。ここには戦争回避の懇話が皆無である。しかし、戦いで決着するものは何もない。夥しい死者と破壊がもたらされるだけである。

私たちは、「これは平和のための戦争なのだ。」と言われても、きっぱり「戦争反対」と言えなければ自分も家族もこの国も守れないことになる。我が国にはその苦い体験があることを忘れてはならない。

藤樹人間学塾…藤樹思想を学び考え実践する

塾長　田中　清行

「藤樹人間学塾」では、藤樹先生の著書を中心に思想を学ぶとともに自らの頭で考え、時事問題と組み合わせて皆で議論しながら思考を深め、日々の生活の場で実践することを目的に毎月開催しています。本稿ではその模様をお伝えいたします。

■五月、第百三十七回人間学塾を開きました。参加者は四名でした。

●テキスト

中江藤樹著『鑑草』の第五巻慈残報の第二話～第四話

●今日のポイント

・継子とわが子は本来一体であるという道理をわきまえなければならない。

・命の躍動に気づいていくと、自然界すべてが大宇宙全体の命の現れであることが感じとれるようになる。その自覚から無限の縁によって支えられ生かされているかという感謝の思いへ結びついていく。

●フリートーキング

・「自然界と人間は一体であり、朝ドラ《らんまん》でも雑草という草はないと言っている。植物が地球を助けている」

■六月、第百三十八回人間学塾を開きました。参加者は七名でした。

●テキスト

中江藤樹著『鑑草』の第五巻慈残報の第五話～第七話

●今日のポイント

・慈善は百福の源、残悪は禍の根源である。万物一体の仁をわきまえる。

・苦悩に支配されるのではなく目の前に目を向けると、私たちの周りには小さな喜びが溢れている。私たち人間は深いところにある愛で皆つながっている。

●フリートーキング

・「実子と継子の問題については、感情を理性でいかにコントロールするかだと思う」

■七月、第百三十九回人間学塾を開きました。参加者は十名でした。

●テキスト

中江藤樹著『鑑草』の第五巻慈残報の第八話～第十話

●今日のポイント

・継子と実子は一体なので、両者を区別することなく愛することが自身に幸福をもたらす。

・「戦争なぜ殺し合うのか」……ヒトは、脳内にオキシトシンと呼ばれる物質を持っており、子供や隣人を愛したりする絆ホルモンである。しかし線引きをしてその線内にあるものを大事にし、その線外にあるものを攻撃する。これが実子と継子、特定の集団と他集団、人種、民族、国等の区別をして他を攻撃することにつながっている。

・戦争をなくす策は、オキシトシンの線引きの輪を拡大することである。そのために、中江藤樹の「孝の思想」が役立つ。

●フリートーキング

・「戦争をなくすには、まず家族が仲良くすることから始まる。人の悪口を言わないことも大事」

■八月、第百四十回藤樹人間学塾を開きました。参加者は八名でした。

●テキスト

中江藤樹著『鑑草』の第五巻仁虐報の序と第一話～第二話

●今日のポイント

・身分の高い人も低い人も同じ人間だから一体であるという道理を自覚して行動すれば、幸福が訪れる。

・鉄からおこった錆が、それから起こったのに鉄自身を損なうように、悪をなしたならば、自分の業が罪を犯した人を悪いところ（地獄）にみちびく。

●フリートーキング

・「戦前の教科書には中江藤樹が載っていたと聞いており尊敬すべき人だと思っていた。結婚して高島へ来て、藤樹先生の勉強をしているのはご縁だと思う」

等の意見をいただきました。ありがとうございます。

人間学に関心のある方は是非お越しください。無料です！

藤樹人間学塾　今後の予定

十月七日（土）、十一月四日（土）、十二月二日（土）、一月六日（土）

■時間　（原則）十五時～十七時

■場所　（原則）安曇川公民館

中江藤樹・心のセミナーから

『豊かなひとづくりへの秘策 ～二宮金次郎の実践から～』【後編】

親子をつなぐ学びのスペース
リレイト　代表
中桐万里子 先生

リーダーたちの意志が高まり、リーダーたちが自分の本心に立ち戻った時に、彼は復興を引き受けました。そして復興を始めようとなったら、今度は村人一人ひとりにも同じように「何に困っているのか、そしてあなたは何を望んでいるのか」と問いかけるのです。村人一人ひとりも農業人としての道を思い出す、そんなことが大変必要だと彼は考えていたんです。しかし、やはり武士たちと同じように村人は、「大雨のせいでこんなことになった、あの災害のせいで台無しになった、時代が悪い、社会が悪い、自然が悪い、だから私たちを何とか助けてほしい、何とか元に戻してほしい、何ならどこかから物資を運んできてほしい」などと言います。

金次郎は、武士たちへと同じように「それは違うのではないか、農業人とはいったい何者だったのか、私たちの先輩は農業人として、何をしてきたのか、この国は、始まりは原野だったのだと、その原野を自分たちの先祖は懸命に切り開いてきた。この土地を懸命に実りの地へとしてきた、その力を持っていたのだ、そうやって人が食べることに困らない、その文化を生み出してきたのが、私たち農業人だったのではないか」と。「先ずは私たちがその道を思い出すこと、自分の原点に立ち返ること、私たちの祖先が一体どんな思いで地域を開いてきたのか、そんなところに立ち返ることから始めようじゃないか」と。農業人の誇りを今一度思い出してほしいのだと言い、農業人一人ひとりの根っこをしっかりと深くつなげようとしました。

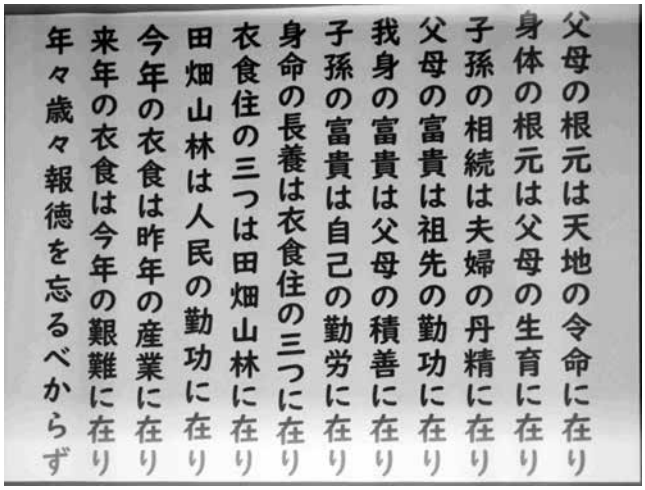
このように一人ひとりが主役になり、土地を主役として生かして町を復活させていく、そのことを金次郎はとても大切に考えました。その土地とともに生きようとその土地を懸命に切り開き、そこで何が生み出せるかを考えてきた。それこそがいわば農業人、農耕民族の発想だった。いわゆる欧米の狩猟型の民族は餌の多い土地がいい、条件のいいところがいい、それを何とかして自分のものにしようと考える。そのような狩猟型の発想ではなく、暑い土地なら暑い土地として、寒い土地なら寒い土地として生かしていく、どんな土地でも、それと向き合いながらそこに実りを生み出す、そのように生産性を考えてきたのが農業人らしい考え方だというんです。

さらに金次郎は「自分は世のため人のためということで邁進できるほど立派な存在ではない。私は元は一農民だった。武士ではない、リーダーだってできない、農村再建の指導なんてする資格もないし、その身分でもないのだ。ところがなぜ指導者ということができたのか、それは小田原藩主大久保 忠真（おおくぼ ただざね）公が、武士でない一農業人であった自分に農村再建の指導者という役割を託され、その思いに報いるにはどうすればいいかを懸命に考えた。仲間や弟子や家族や様々な人たちが自分を支えてくれている、その思いを感じるからこそ何とかもう一歩先へとその思いが持てるのだ」と語っています。

金次郎が生まれ育った小田原の町（現：神奈川県の小田原市）には酒匂川（さかわがわ）という暴れ川があり、金次郎たちも度重なる氾濫によって大きな被害を受けました。江戸幕府によって派遣された多くの技術者が治水に苦労し、その記録を読むのも大好きでした。「わが町のために故郷を遠く離れて一生懸命になってくださった方々があった。私も、自分が生まれ育った場所ではない所でも力を尽くして恩返しをする。そんな意味もあったのだ」と語っています。

私たちはどこからやってきたのだろうか、根っこのこと、あるいは道のこと、そんなことを考えようとの呼びかけのために金次郎が作ったのが「報徳訓」です。私たちが忘れがちな根っこ、私たちが忘れがちな道、そんなものを改めて思い出そうと、そのために作ったものでした。

報徳訓全文



父母の根元は天地の令命に在り
身体の根元は父母の生育に在り
子孫の相続は夫婦の丹精に在り
父母の富貴は祖先の勤功に在り
我身の富貴は父母の積善に在り
子孫の富貴は自己の勤労に在り
身命の長養は衣食住の三つに在り
衣食住の三つは田畑山林に在り
田畑山林は人民の勤功に在り
今年の衣食は昨年の産業に在り
来年の衣食は今年の艱難に在り
年々歳々報徳を忘るべからず

父母の根元は天地の令命に在り、身体の根元は父母の生育に在りと続いていくもので、一つ一つのものを当たり前と思ってしまえばそれまでだけれども、もう一度原点に戻ってみる、全てには必ずルーツがある、あるいは根っこがある、根っこをもう一回掘ってみましょうということです。「報徳訓」は二つに分けることができます。一つ目のパーツはここ（最後の一行以外の部分）になり、もう一度心の眼を開いて様々なものの根っこと繋がりましょうということです。一つ一つのものがなぜあったのか、田んぼって当たり前にあるんだけれど原野を誰かが切り開いたもの、ここにいる自分は誰かが育ててくれたというふうに心の眼を開かないと見えてこないもの、それを徳と呼びました。金次郎は徳を良いところという意味で使ったわけではなく、良いか悪いかは見え方次第で、今ここに存在していること、それがすごく大事なことだと言うんです。心の眼を開くこと、「心田を耕すこと」だと言います。「心田の耕し」があってこそ生まれるのが、第二パーツである最後の一文ということになります。彼にとって最も大事だったパーツはこの一文、「年々歳々報徳を忘るべからず」というところでした。一体どういうことか、私たちがここまで来るのにたくさんの人たちと繋がってきた、そういう根っこと繋がれた時にこそ、立ち上がり自分自身に何ができるか、そのことを考えよう、自分にはどんな恩返しができるのか、報徳というのは受けた徳に報いようとする、受けた徳に恩返しをしよう、自分なりにどう行動できるかを考えようと彼は呼びかけたわけです。自分のためじゃないからこそ、底力を、あるいは自分自身が懸命になれる、その大きな力を手に入れることができる。この一言に凝縮されているということです。

報徳訓に書かれている「心田の耕しを田畑の力に変える」という構造が昨今では道徳と経済の繋がり方なんていうふうにも言われたりします。まずは心を耕すこと、心を豊かにすること、根を太くすること、そのことが町の力を、そして具体的な行動を強くしていく、そんなことではないかなあと思うわけです。

金次郎自身はやはり一人ひとりの行動というもの、そのことが力強く生まれること、そのことが大事だと考えたわけです。金次郎一人が頑張って六百もの村が豊かになるわけはありません。町の一人ひとりが、あるいは村の一人ひとりが立ち上がること、そのことから生まれていくものだったと。そんなまさに報徳、それはいわゆる恩送りの構造になっているというふうにも言われていたりします。いわば恩返しというのはよくあるやり方ですが、根っこは過去からもらってきたものを未来へと生かしていくこと、親からもらったものを子どもたち孫たちへと向けること、先輩からもらったものを後輩へと向けること、まさにしっかりとバトンを渡していくこと、そうやって未来創造やまちづくりをしてきたのがこの国の国づくりの在り方なのではないかなあと思います。

結びになりますが、皆様こんなことをお考えいただきたいと思います。この字（生）をご覧になった時にいろんな読み方があると思うんですが、読み方、大体何通りぐらいあるか想像できるでしょうか。なんと、百五十種類以上の読み方があるそうです。何が言いたいのかというと人間の生き方、あるいは一人ひとりの価値観、それは実に多様であるということを意味しようとしているのではないかという方があるんです。ところがこの字（死）はいったい何通りの読み方があるかということ、実はこちらの字は一通りの読み方しかありません。「し」という読み方です。このことから日本人のある種の価値観が見えるのではないでしょうか。誰でも必ず死を迎えるけれど、そこに至るまでの生き方、それは実にカラフルで多様なものである。一人ひとりが一体何を幸せと考え、どんな根っこと繋がって、自分がどんな花を咲かせていこうとするのか、それは様々でありうるのだということを金次郎のこの姿、常に一歩前へとそのことを大事にしていたあの足が象徴している。しかしその答えは一通りではなく多くの道があり多くの答えがある。その答えを導くためにも自分自身の何気ない日常、当たり前のような光景、そのことにもう一度向き合ってみること、そこで心の眼を開き、気づき、根との繋がり、そこから自分自身の行動へと出ていく、そこで生まれるのが豊かさ、そんなものなのかもしれないというふうに思ったりします。このような皆様とのご縁をいただきましたこと、そしてまた藤樹先生とのご縁があるこの地、また二宮家とも大変ゆかりの深いこの地で一時をいただいたことにあらためて感謝を皆様おひとりおひとりの日常がよりカラフルで力強い希望に満ちたものになりますようにとその願いを込めて、お話を終わらせていただこうと思います。長時間にわたりご清聴いただきましたこと、ありがとうございました。

本年三月二十一日に開催しました「中江藤樹心のセミナー」で、中桐万里子先生にご講演いただきました。その講演内容を渕田豊朗副会長によって文章化されたものです。

令和五年　藤樹賞の受賞者に
（故）松下亀太郎氏
松下　芳子氏

去る六月十日（日）に安曇川公民館で開催された令和五年度定時総会に合わせて、令和五年藤樹賞の授賞式が行われました。

総会議案の審議終了後、表彰委員会委員長の今城克啓常務理事から、受賞者の発表と表彰理由の説明がありました。（その内容は左記の通りです。）その後、田中会長から松下芳子様に表彰状と記念品を授与されました。

受賞された松下芳子氏

（故）松下亀太郎氏の写真
（湖西中学校校長室）

■高島藤樹会の理念

「温かくて深い、近江聖人中江藤樹の「孝」の思想を高島から全滋賀へ、全国へ、全世界へ広める」

■藤樹賞の理念

藤樹先生の生き方や考え方に共感し、それを広めようという志を持って活動されている団体や個人の方を表彰する

■表彰者

（故）松下亀太郎様、松下芳子様

■表彰理由

（故）松下亀太郎様は青柳小学校長としてご在任中、藤樹先生の思想や学問をどう教育の場に活かせばよいのかについて研究と実践を深められ、小学生の読み物として「藤樹先生」と題した副読本を刊行されました。

現役の教員を退かれてからは一層藤樹先生の研究に専念され、ついに一九八一年に名著『物語中江藤樹』を著されました。

この名著は、史実を忠実に再現しながら大胆に人物を蘇らせており、歴史と文学を両立させた誰にでも親しめる優れた藤樹読本であります。

さらに、八十六歳になられた二〇〇六年には、これまであまりスポットが当たっていなかった私塾藤樹書院と大溝藩の関係や、幕末や大政奉還後の藤樹書院にまつわる歴史上の人物などを分かりやすくまとめた「中江藤樹と大溝藩」を自費出版されました。

このように（故）松下亀太郎様は、生涯藤樹先生を敬慕し、藤樹先生の人と思想を研究し続け、優れた著作を重ねられてこられました。

松下芳子様におかれましては、（故）松下亀太郎様の研究や実践を永年支えられ大きな役割を果たされてきました。そして、ご自宅で保存されていました中江藤樹関係の書籍数十冊を、昨年中江藤樹記念館等に寄贈されました。

多くの貴重な書籍は、藤樹先生の生き方や考え方のこれからの普及啓発に欠かせないものであります。

このようなことから、（故）松下亀太郎様と松下芳子様が藤樹先生の生き方や考え方を広められた功績は多大なものがあると考えております。

このたび、藤樹賞の理念である「藤樹先生の生き方や考え方に共感し、それを広めようという志をもって活動されている団体や個人の方」として、永年のご活動に高島藤樹会として深く感謝を申し上げ、表彰をさせていただきます。

（表彰委員会）

藤樹先生　あれ　これ

「常省祭」が開催される

藤樹書院（公益財団法人）主催の「常省祭」が、四十六名の出席者のもと七月二十三日に藤樹書院において開催されました。

渕田豊朗理事長の開会のことばに続き、御神酒を捧げる初献を渕田理事長、亜献を中川義人高島市副市長、終献を髙木広和高島市議会議長がなされました。次に、出席者全員による焼香を行った後、川島浩之高島市教育長の先導によって「孝経」が拝誦され、祭典が閉じられました。

今回、書院所蔵物で紹介（展示）された資料は、常省先生直筆の『江西小川講堂之會約』（常省先生が一六八一年に、藤樹書院で学ぶ人たちが守るべき約束として書かれたもの）でした。

引き続き、併設の良知館に場を移して、藤樹神社宮司の中村敏夫氏による『宮司就任に当たっての想い』のご講演を拝聴しました。

常省祭について

四十一歳で亡くなった藤樹先生には、長男虎之助七歳、次男鍋之助三歳、三男彌三郎（常省）生後五十日の三人の遺児がありました。（中略）

藤樹の門人で岡山藩主池田光政に仕えていた熊沢蕃山は、光政に遺児たちの召し出しを願い出て、其れが認められ遺児は順に岡山に行き、禽獣として仕えました。しかし、二人の兄たちが二十歳を過ぎると相次いで死去したため、彌三郎が中江家の家督を継ぐことになりました。やがて彌三郎は岡山藩校の副学校奉行である学校監になりましたが、幕府の心学忌避（林羅山を中心とした朱子学が国学となり、藤樹の考え方はそれに沿わなかった）により蕃山と光政との間がうまくいかなかったこともあり、小川村に帰りました。三十一歳の時でした。（中略：京都への移住、対馬藩の客分等を経て、小川村に帰って一か月後、六十二歳で死去）

常省祭は藤樹書院の年中行事として七月二十三日に儒式で執り行われ、幕府の心学忌避の中で父、藤樹先生の学問を受け継いだ常省の生涯を偲ぶとともに、孝経拝誦、藤樹先生の遺品、書籍等の文化財展示説明などを行ってきています。

（右は、令和元年度常省祭の要項から抜粋させて頂いたものです。）

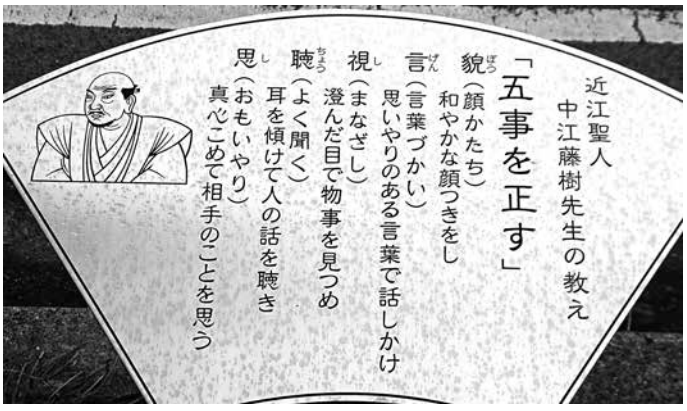
「よえもんさん通り」に並ぶ「藤樹先生のことば」

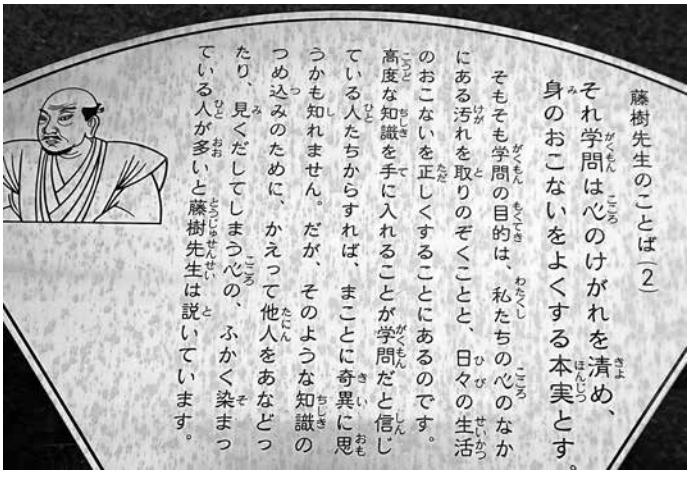
JR安曇川駅から道の駅「藤樹の里安曇川」へ向かう「よえもんさん通り」に、扇型の銘板「藤樹先生のことば」が八枚並べられていることをご存じでしょうか。

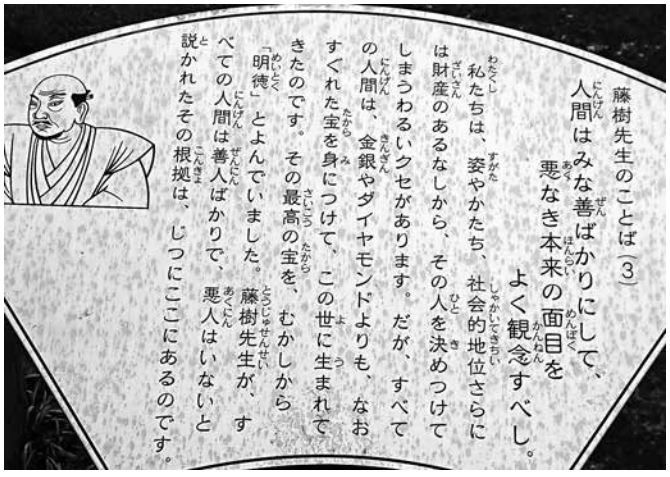
これらは、旧安曇川町時代（二〇数年前）に、「よえもんさん通り」が整備されたことに合わせて、設置されたものです。扇型の銘板に刻まれた「藤樹先生のことば」の選定・解説は、当時の安曇川町教育委員会におられた中江彰氏が、ご自身の編・著『中江藤樹のことば』等をもとになされました。

「よえもんさん通り」

皆様も是非一度、「よえもんさん通り」で「藤樹先生のことば」をご覧になってください。下の写真は、そのうちの四枚の銘板です。残りの四枚は現地でご確認ください。







藤樹書院・良知館通信⑮

「三尺の泉」

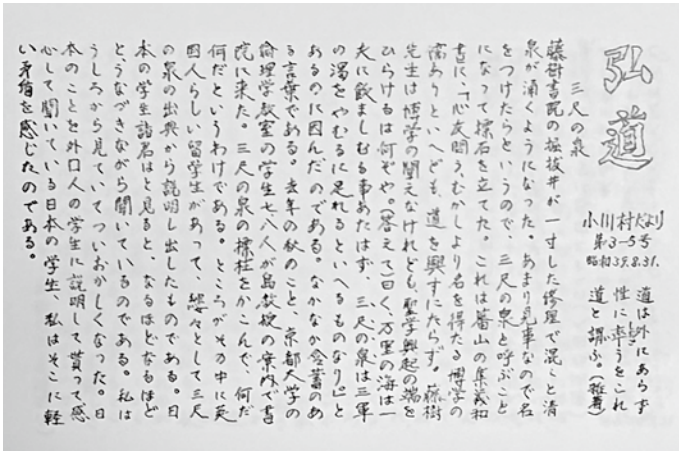
藤樹書院　志村　洋

藤樹研究者、松本義懿先生が全国の知人、教え子、藤樹先生を慕って小川村を訪れた人達に届けておられたハガキ通信「小川村だより」を取り纏めた「小川村だより」という書籍を、松本孝太郎さんからお借りする事が出来、見る機会を得ました。

この本は、昭和五十三年八月、高島教育会発行となっており、松本義懿先生が昭和五十一年に亡くなられて二年後の発刊です。

昭和三十七年四月から昭和四十六年一月まで、通算一〇四号の中から、今号では昭和三十九年八月三十一日付け、第3巻―5号の「三尺の泉」を紹介します。（下の写真参照）

藤樹書院の掘抜井が一寸した修理で滾々と清水が涌くようになった。あまり見事なので名を付けたらというので、三尺の泉と呼ぶことになって標石を建てた。これは蕃山の集義和書に「心友問う、むかしより名を得たる博学の儒ありといへども、道を興すにたらず。藤樹先生は博学の聞えなければ、聖学興起の端をひらけるは何ぞや。（答えて）曰く、万里の海は一夫に飲ましむる事あたはず。三尺の泉は三軍の渇をやむるに足れるといへるものなり」とあるのに因んだのである。なかなか含蓄のある言葉である。去年の秋のこと。京都大学の倫理学教室の学生七、八人が島教授の案内で書院に来た。三尺の泉の標柱を囲んで、何だ、何だというわけである。ところがその中に英国人らしい留学生があって、縷々として三尺の泉の出典から説明し出したものである。日本の学生諸君はと見ると、「なるほどなるほど」と、うなずきながら聞いているのである。私はうしろから見ていてついおかしくなった。日本の事を外国人の学生に説明して貰って感心して聞いている日本の学生、私はそこに軽い矛盾を感じたのである。


弘道

三尺の泉

藤樹書院の掘抜井が一寸した修理で滾々と清水が涌くようになった。あまり見事なので名を付けたらというので、三尺の泉と呼ぶことになって標石を立てた。これは蕃山の集義和書に「心友問う、むかしより名を得たる博学の儒ありといへども、道を興すにたらず。藤樹先生は博学の聞えなければ、聖学興起の端をひらけるは何ぞや。（答えて）曰く、万里の海は一夫に飲ましむる事あたはず。三尺の泉は三軍の渇をやむるに足れるといへるものなり」とあるのに因んだのである。なかなか含蓄のある言葉である。去年の秋のこと、京都大学の倫理学教室の学生七、八人が島教授の案内で書院に来た。三尺の泉の標柱をかこんで、何だ何だというわけである。ところがその中に英国人らしい留学生があって、縷々として三尺の泉の出典から説明し出したものである。日本の学生諸君はと見ると、なるほどなるほどとうなずきながら聞いているのである。私はうしろから見ていてついおかしくなった。日本の事を外国人の学生に説明して貰って感心して聞いている日本の学生、私はそこに軽い矛盾を感じたのである。

この高島藤樹会三十三号がお手許に届く頃は、「猛暑の夏」を振り返っておられる頃かと思いますが、先日、この「三尺の泉」の水質検査を行いました。結果は、

「水道水質基準項目について基準に適合」との判定。特に、「味」「臭気」とも異常なしとの事でした。「おいしい水」の確認が出来、嬉しく思っています。

賛助会員一覧

★新規賛助会員のご紹介

令和五年八月末日までに、ご加入いただきました賛助会員をご紹介します。ご加入ありがとうございます。

○有限会社 クリエイト・マエダ
（高島市安曇川町上小川）
○株式会社 ミヅホ工芸
（高島市安曇川町青柳）
○株式会社 森下工業
（高島市安曇川町西万木）

★既加入の賛助会員一覧

ご協力ありがとうございます。

○ウェストレイクホテル可以登楼
○税理士法人 淡海総合会計
○大津公証人会　白髭博文
○大溝工業 株式会社
○株式会社 大山建設
○岡本アルミ建材 株式会社
○川島酒造 株式会社
○川島織布 株式会社
○株式会社 Ｇｒｏｗ―Ｓ
○株式会社 桑原組
○有限会社 宏和商事
○税理士法人 小畑会計事務所
○株式会社 才川食品店
○佐治タイル 株式会社
○株式会社 澤村
○株式会社 シグマックス
○清水安三記念館
○有限会社 白浜荘
○新旭電子工業 株式会社
○杉橋建設 株式会社
○ソエダ 株式会社
○高島鉱建 株式会社
○田中マネジメント事務所
○株式会社 ＴＡＤコーポレーション
○鉄屋商事 株式会社
○寺子屋まなざし童心塾
○有限会社 天平フーズ
○株式会社 戸井薬局
○とも栄 藤樹街道本店
○株式会社 ナカサク
○ナカショウ 株式会社
○株式会社 中田運送
○中村印刷 株式会社
○株式会社 中村測量設計
○ニッケイ工業 株式会社
○八田建設 株式会社
○有限会社 馬場塗装
○富士包装紙器 株式会社
○戸次会計事務所
○株式会社 ホリゾン
○有限会社 丸三旅館
○株式会社 ヨシダヤ
○株式会社 リンクス
○有限会社 綿庄食品店

（五十音順）